様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ９ 月 ２８ 日現在

機関番号：３４３２２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2014
課題番号：２５７７００５０

研究課題名（和文）大戦間期フランスにおける壁画と前衛芸術の相関関係――「壁画芸術」協会を中心に

研究課題名（英文）Relationship between Mural Art and Avant-Garde Art in France of the Interwar Period : Analysis of the "Art Mural" Group

研究代表者
山本　友紀（YAMAMOTO, YUKI）

京都嵯峨芸術大学・芸術学部・講師

研究者番号：３０５３７８８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、大戦間期のフランスにおける壁画芸術の復興の動きの中でもとくに、組織的な運動を展開していたにも関わらず、未だまとまった研究のなされていない対象として、サン＝モール（サミュエル・ギュイヨー）が1935年に創設した「壁画芸術」協会の活動に着目し、書誌と図像に関する情報の収集を出発点に、19世紀末の装飾芸術運動との連続性と差異を視野に収めたうえで、フランス国外の芸術的動向との相関関係をも考慮に入れつつ検証することにより、壁画復興の動きが前衛芸術家を中心に組織化される過程とその活動の波及の程度を実証的に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The primary focus of our research has been the "Art Mural" group, an influential artistic movement active in France between the two great wars. "Art Mural" was founded by the artist Saint-Maur (pseudonym of Samuel Guyot) as a way to revive interest in the medium of mural art. However, despite its ambitious nature and influence at the time, it remains largely unknown, on account of a general lack of interest from researchers. Our research, which is mostly based on the collection of information from contemporary documents, also includes an analysis of the relationship between this movement and similar experiments in neighboring countries. It also attempts to clarify its peculiar role withing the larger context of mural revival in France and Europe, which had been constantly evolving since the end of the 19th century.

研究分野：美術史

キーワード：壁画　前衛芸術　大戦間期フランス　「壁画芸術」協会

１．研究開始当初の背景

フランスにおける壁画は、ピュヴィ・ド・シャヴァンヌやナビ派の作品に代表される装飾芸術の伝統を前史にもっている。とくに、19 世紀末のアール・ヌーヴォーから 1920 年代のアール・デコにかけての、「装飾的」な絵画という概念自体の展開を背景とした装飾と芸術の関係については、当時の装飾芸術にまつわる言説の分析をも交えた詳細な研究が 1980 年代以降本格化した。

一方、1930 年代フランスにおける美術に関する国家主義的動向や社会的役割の重視を背景として、様々な芸術家、思想家、政治家が、装飾芸術をめぐってそれぞれの思惑を交差させていたことについては、近年、個々の事例について検証がなされてきている。そのなかで、大戦間期における壁画の再生についても、パリ万博に関連した事項として言及されてはきたものの、そこに至るまでの芸術家たちによる自律的な運動原理を見出そうとする努力は本格的になされてこなかった。

そこで、本研究では「壁画芸術」協会における壁画に特化した実践的な活動がフランスの壁画制作に向けた動きの受け皿として機能していた可能性に着目することにした。「壁画芸術」協会に関する先行研究としては、ルネ・ドティの『サン・モールと壁画芸術』（*Saint-Maur et L'art mural 1925-1949 : L'histoire et le 1%,* 1999）においてのみ、画家・彫刻家サン＝モールの活動を中心とした壁画芸術が取り上げられているが、1930 年代を中心になされた壁画をめぐる様々な活動や言説についてはそのアウトラインを紹介するにとどまり、それに関与した芸術家たちの具体的な制作活動や作品については語られておらず、上述の研究成果を継承・発展させる必要性があるとの認識に至った。

２．研究の目的

本研究は、大戦間期のフランスにおける壁画芸術の復興の動きの中でも、組織的な運動を展開していたにも関わらず、未だまとまった研究のなされていない対象として、サン＝モール（サミュエル・ギュイヨー）が 1935 年に創設した「壁画芸術」協会の活動に着目し、書誌と図像に関する情報の収集を出発点に、19 世紀末の装飾芸術運動との連続性と差異を視野に収めたうえで、フランス国外の芸術的動向との相関関係をも考慮に入れつつ検証することにより、壁画復興の動きが前衛芸術家を中心に組織化される過程とその活動の波及の程度を実証的に明らかにすることを目的とする。

とくに、「壁画芸術」協会の活動の実態と戦略の解明、同協会の活動の美術行政官や美術批評家の間での受容、1937 年のパリ万国博覧会への参加との関係、およびヨーロッパ諸国の芸術政策に対するフランスの反応およびその影響を明らかにすることが主な目的である。

３．研究の方法

本研究の基礎となる国内外での資料の調査、収集を第一の課題とし、とくに国外（主にフランス）での調査において、これまで発見されていなかった新資料の掘りおこしを行い、研究対象に関連する書誌や画像データに関する情報を集積し、それらの資料、図像を収集したうえですべて整理・データ化する。これらの資料収集調査に基づいて、以下の 3 点についての考察を行う。

（１）「壁画芸術」協会に関する資料収集を通じて、1935 年から 1949 年にかけて計 4 回開催されたサロンのカタログを主な調査対象とし、壁画芸術運動に関わった芸術家、美術批評家、政治家ならびに「壁画芸術」協会主催のサロンに出品された作品について調べ、まず、「壁画芸術」協会の活動の全体像を把握しながら、「壁画芸術」協会の活動実態やその戦略について精査する。次に、カン

ディンスキー図書館、フランス国立図書館、パリ国立公文書館において収集した資料も交えて、「壁画芸術」協会が美術行政官や美術批評家の間でどのように認知されたかについて検討し、フランスにおける壁画運動におけるその活動の波及の程度を考察する。

（2）ミラノおよびローマの国立図書館においてファシズム時代のイタリア芸術を、壁画制作に関連する資料収集を行い、ヨーロッパ周辺各国における美術政策のフランスにおける受容に関する言説を研究対象とした。とくに「壁画宣言」を発表したノヴェチェント運動の中心人物マリオ・シローニについて調査に重点を置く。これらの資料を通じて、国際的な枠組みの中でフランスの壁画制作の展開について考察する。

（3）さらに、大戦間期フランスにおける装飾芸術の動きとモダニズム芸術の直接的関係を、「装飾」という概念の変容という観点の下に分析し、そこにはらまれた壁画に付与された美術におけるナショナリスティックな性格を 1930 年代という歴史的文脈のもとで考察する。

４．研究成果

（1）大戦間期の壁画芸術という、フランス装飾芸術とモダニズム芸術の双方の分野において研究基盤の未整備な領域に対してアプローチし、芸術の社会的役割が強く求められた大戦間期特有の文脈のもとに、装飾芸術にまつわる言説がいかに前衛芸術のつくりだしたイメージの受容に作用しているかを明らかにした。この研究成果は、著書『フェルナン・レジェ ：オブジェと色彩のユートピア――キュビスムからフランス人民戦線まで』において論考としてまとめた。

（2）外国人を含め、前衛的とされた多くの芸術家たちが関わった「壁画芸術」協会の活動をソ連、ドイツ、イタリアなど、ヨーロッパ諸国の芸術政策と関連させながら考察することにより、フランスにおける壁画をめぐる言説が組み立てられて行く過程を明らかにした。とくに、フランスにおける壁画の実践は、イタリアにおいてファシズムの美学と結びついた壁画運動の影響を大きく受けたものである点を指摘した。

（3）壁画芸術に結び付くことを可能とした前衛的な造形理念は、第一次世界大戦の時期に生まれた「秩序への回帰」におけるモダニズム芸術の方向転換の一環に位置付けることで、20 世紀初頭のキュビスムなどの前衛芸術が壁画という芸術形式を通じて新たな展開をみせ、1937 年のパリ万博でその成果が一定程度示されたことについて指摘した。

（4）ル・コルビュジェとオザンファンのピュリスム、レジェ、さらには「アブストラクシオン・クレアシオン」のグループに参加した抽象芸術を推進した前衛芸術家たちなど、1930 年代のフランスにおける芸術活動を対象として、モダン・アートと自然に対する新しい視点との結びつきについて考察し、これらの造形が壁画芸術のようなモニュメンタルな芸術を通じて発展したことを明らかにし、これを論文「モダン・アートと〈自然〉の表象―1930 年代フランスにおける抽象芸術に関する一考察」としてまとめた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　1　件）

<u>山本友紀</u>、「モダン・アートと〈自然〉の表象―1930 年代フランスにおける抽象芸術に関する一考察」神戸芸術工科大学紀要『芸術工学 2014』神戸芸術工科大学学術リポジトリ、査読有

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　1　件）
山本友紀、春風社『フェルナン・レジェ ：
オブジェと色彩のユートピア――キュビス
ムからフランス人民戦線まで』2014

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
山本 友紀　（YAMAMOTO,Yuki）
京都嵯峨芸術大学・芸術学部・講師
研究者番号：30537882

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：